
真夜中の騎士

三谷尾だま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夜中の騎士

【Zマーク】

Z2299BA

【作者名】

三谷尾だま

【あらすじ】

『私』の中の『彼』は、時と共にだんだんと変わつていった。けれど、彼は全く変わらなかつた。見た目も、中身も。引っ越し思案な姫の淡い恋物語。約8,700文字。

(前書き)

IJの作品はPG12程度です。性表現の仄めかしがありますが、直接描写はありません。キーワード・恋愛ファンタジー、片想い、そこそこハッピーエンド

彼は父の騎士だった。

寡黙で、心の中を見透かすかのような鋭い視線が印象的だった。子ども心に恐怖を感じ、夢にまで見たほどだ。彼に見つめられて動けなくなつた私に、彼が襲い掛かってくるのだ。飛び掛つてくる直前に目を閉じて、恐怖で目を覚ます。目を覚まさなければどうなつたのだろうか。口が裂けていたから、食べられたのかもしれない。

私の中で、彼はずつと怖い人だつた。私は人一倍怖がりだつたら、特に怖かつた。怒鳴られたわけでもない、暴力を振るわれたわけでもない。

笑つてしまふことに、直接口を利いたこともなかつた。目が合えば、会釈を返されるだけ。彼の名前を口にしたことなかつた。侍女から聞いて、知つてはいたけれど。

何故なら、恐ろしい彼の噂を聞いて、名前を口にしただけでも呪われてしまいそうに思えた。人を、食べるのだという。私の夢も、そのせいだと思う。

実際に口は裂けていなかつたし、外見も恐ろしくはなかつた。あの、射抜くような目さえなければ。この国には珍しい、黒い眼。闇を寄せ集めたかのようで恐ろしい。まだ十分に大人にはなりきつていない肢体に、不似合いだつた。

私がだんだんと歳を取り、大人へと近付いていっても、彼はずつと幼いときに見たあの姿と同じだった。同じ背の高さ、同じ顔、同じ表情、同じ声、同じ眼。大きくなれば、彼のことが怖くなくなると思つていたのに、いつまで経つても怖いままだった。

彼は強く、父は彼のことを信頼しているようだった。それは、彼の地位が物語つていた。腕を信頼して任せているのだ、あの少年……？いや、青年に。

私が十六になつたときのことだつた。相変わらず彼はそのままで、そのうち私が追い越してしまふのではないかと思えた。

そのころ私は、寝室へ向かう途中にある渡り廊下を通るのが怖くて怖くて堪らなかつた。何故なら、下に生えていた樹がかなり大きくなつて、渡り廊下を追い越してしまい、それが夜、風に揺れて不気味なのだ。お付きの侍女が一緒にいるのだが、それでも心細さは変わらない。彼女は、私の後ろを歩いていた。

前々から怖いとは思つていて、私と共に成長していく樹は、ますます不気味になつていつた。風でざわざわ揺れ、迫り来る闇を象徴しているかのようだ。

あるとき、私はぽろつとそのことを父に言つてしまつた。父は、怖がる私を怖がりだと笑つた。私は恥ずかしくて泣きそうになつた。やはり、口にしなければ良かつたのだ、と後悔した。そして、父の側に彼がいて、そのことを聞かれてしまつたことをさらに後悔した。

内心、彼も私を笑つているのだろう、と思つた。彼とは一瞬、目が合つただけで、すぐに逸らされただけだった。

そのあと、父の前を辞するとき、彼に呼び止められた。名前ではなかつた。そうだ、私の名前を呼ぶのは父と母しかいない。心臓が跳ね上がり、恐ろしい気持ちを抑えながら振り向いた。父がいるから、酷いことをされるはずもない、と分かつてはいたのに。

しかも、彼は私が不注意に落としたハンカチーフを拾ってくれただけで、本当に用はそれだけだつた。あらぬ猜疑心を働かせてしまつた自分が恥ずかしくなると同時に、ハンカチーフを受け取つて固まつてしまつた私は、彼が私を一瞥し、父に会釈して立ち去るうとする背中に、お礼の言葉を振り絞ることで精一杯だつた。

そして夜。夕食を終えて部屋に帰る時間がやつて來た。いつも渡り廊下はいつものように恐ろしく、手前に来ると身構えてしまつた。

無駄だと分かつてはいたが、渡るまえに安全を確かめようとするし、途中に黒いものが見えた。樹の影ではない、風に揺れる小枝の中で、その影は止まつていた。当然、足が竦む。

侍女に言つと、彼女は訝しげにそちらを見、苦笑いしながら答えた。言われてみて見返すと、彼女の言うとおり、それは手摺のすぐまえに立つてゐる彼だつた。少しもたれかかるようにして、夜空でも見上げてゐる風だつた。人心地着き、意を決して渡り始めた。

「ほんばんは……」

擦れ違つとき、絞り出すよじて挨拶をすると、彼は黙つて会釈をした。

目付きは相変わらず。何とか声が震えないように言えた自分を褒めた。

めたくらいだ。廊下を渡り終え、無事に部屋に戻ることができた。

その次の日も、その次の日も、彼は渡り廊下の途中にいた。鈍い私は、一週間くらい経つまで、私が渡り廊下が怖い、と言つたから彼がそこにいるのだと気付かなかつた。最初の日など、廊下よりも彼の存在が怖かつたのだ。

そのことに気付いてから、彼の怖い夢を見なくなつた。今度は、彼が笑つてゐる夢を見るようになつた。夢の中の彼は、怖くなかつた。

彼が怖いのは、微笑まないからだ。

次第に、私は夜の渡り廊下を歩くのが楽しみになつた。そこに行けば、彼がいるから。彼は空を見上げていた。

夢の中では、彼は微笑んで私を見ていた。私の名前を呼んでくれていた。

そしてある日、私に『好き』だと囁いた。

ビックリして目が覚めた。心臓がドキドキしていて、壊れそうだつた。

現実の彼は、微笑んではくれないし、ましてや名前など呼んでくれない。懸想されるなどもつてのほかだ。夢の中の彼は彼ではない。私の願望なのか。

彼が渡り廊下に立つよつになつて半年ほど経つても、まともに話

をしたこともなかった。渡り廊下は怖くなくなつたのに、いまでは彼を意識してしまつて、逆に変な風になつてしまつた。

昼間なら、もう少し会話ができるのではないか、と思つていたのに、彼は昼間あまり見かけない。だから、珍しく彼が廊下を歩いているのに気付き、柄にもなく駆け寄ろうとしてしまい、裾を踏んで転んだ。何と無様なのだろう。不恰好な場面しか見られてないのではないか。

ショックのあまり起き上がれないでいる、だんだんと近付いてくる足音。すぐ横で止まり、膝の上に抱き起された。今度は違うショックで口も聞けなくなつた。

「姫、お怪我はございませんか？」

相変わらずの田付き。でももつ怖くない。彼の手が、私の頬の髪を払つた。その手は、冷たかった。今までになく接近した彼の顔を見つめた。このとき私は、初めて彼の名前を口にした。

「はい」

もう一度、呼んでみた。

「「」用であれば何なりと、姫」

答えてくれたのが嬉しくなり、恐る恐る彼の頬に手を伸ばした。この時点で、私は夢と現実の違いが分からなくなつていたのかもしれなかつた。彼の頬も冷たかつた。

「冷たいわ……」

呟くと、彼が目を伏せて謝った。

ほんのりと汗ばんだ肌には、彼の冷たさは心地良かつた。触つても不快な感じが全くしない。輪郭を何度もなぞった。

「姫、お歩きになれますか？」

表情を変えずに彼が私の手を除けた。妨げられたことが不満だつた。夢の中の彼なら、抱き締めて口付けをしてくれるに違いないのに。

返事をしなかつたら、彼は私を抱きかかえて立ち上がり、椅子がある場所まで運ばれた。落とされるのではないか、とさすがに怖くて、下ろされるまで動くことはできなかつた。

「(1)無礼を……」

スッと彼が身を引いた。私は咄嗟に手を伸ばした。その手を彼が取り、膝を突いて口付けをされた。忠誠の口付け。手が熱い。息が自然にできなかつた。彼が会釈をして去つていつた。私は、呼び止めることすらできず、その後姿を見つめていた。

ますます私は、彼とともに話すことができなくなり、夢の中の彼は私に愛しか囁かなくなつた。夢が覚めなければ良い。醒めなければ、彼はずつと微笑んでくれるのだ。

「姫……」

彼の声がした。夢だ。いいえ、夢の彼は私を名前で呼ぶ。姫、な

「姫、このよつな場所で眠られては、お風邪を召しますよ」

「姫、このよつな場所で眠られては、お風邪を召しますよ」

夢ではない。

私は飛び起きた。揺り起にじていたらしい彼は、さつと身を引いた。

庭の木陰で読書をしていたつもりが、いつの間にか居眠りをしていたらしい。慌てて頬を擦ると、そこにはくつきりはつきりと、本の跡が残っていた。カーッと頬が熱くなり、彼の様子を窺う。もしかすると、まだ見られていない可能性があった。

彼は、笑っていた。これは、夢なのだろうか。夢の中と同じ。嬉しくなつて微笑み返した。抱き締めて欲しくて、ふらふらと立ち上がり、両腕を伸ばした。

それなのに、そのタイミングで椅子の足に引っかかつて転びそうになつた。だが、倒れかかったのは芝生の上ではなく、彼の腕の中だつた。

「姫、まだ寝ぼけていらっしゃるのですか？」

すぐ上で彼の声がした。彼の制服にしがみ付きながら顔を上げると、もう彼は笑ってはいなかつた。あれは、幻だつたのだろうか。深い闇の双眸に見下ろされていた。

「……カディ」

つい、軽々しく呼んでしまった。だって、夢の中の彼が、そう呼んで欲しいと私に言つたのだから。

「姫、お付きの者が御身を捜していましたよ」

さらり、と受け流されてしまった。

「……カティと呼ぶのは、嫌？」

彼の表情は変わらない。喜んでいられるようにも、嫌がつていられないようにも見えない。

「いえ、お好きなようになさい」とさわやかに

つまり、私に向と呼ばれようがどうでも良い、ということだらうか。ガツカリしてしまった。私なら、彼から名前で呼ばれたら嬉しいのに。

でも、私は呼びたかったので、そう呼ぶことにする。

彼をそんな風に呼ぶ者など、城中を捜してもいなかつた。仕事中以外の彼は他者と群れることもない。彼が独りでいるとき、その肩に白い鳥が乗っているのを遠くから見かけたことがあった。動物には好かれるのかもしれない。

彼との間に進展がないまま、彼は父の命令で遠征に行つてしまつた。彼のいない日々、渡り廊下には誰もいない。寂しくて、寂しくて、彼に会いたかった。だから、毎晩のように彼は、私の夢の中に現れて、恋人のように振舞う。会いたくて、会いたくて、夢に見た。

一年後、彼は遠征から戻つてき、父から功績を認められ、さらにお気に入りとなつた。一年振りに会つた彼は、なにも変わっていなかつた。

黒い瞳、見据える視線、そして素つ氣ない態度。

未だ子どもの域を十分に抜け出しきれていない肢体。彼は大人にならなかつた。だから、恐ろしいのだ。子どものまま。成長しない。時間だけが過ぎていく。私はどんどん大人になって行くのに。このままだと、いつか私は彼を追い越して、大人になって老いていくのだろうか。

何と残酷な。

だから彼は畏怖されている。古いないから。その外見と強さが釣り合わないから。彼は人間ではないのだ。

侍女らに聞いたその話が本当なのか、彼に直接確かめたことはない。怖くて、聞けなかつた。なかなか話す機会もなかつたのだから。だが、確かめなくとも彼が老いを超越していることは明らかで、私自身が知つていた。

彼がいなかつた間、夢の中での私たちは結婚を誓い合つた。夢から覚めるといつも笑つてしまつ。でも、嬉しかつた。

彼の言葉が態度が心が、現実と違つても、いづれ私が彼を置いていつてしまつとしても。夢の中くらいでは、幸せになりたかった。本当にそう、それが夢であつても。

私は、どうにか彼に近付きたくて、毎日一度は勇気を振り絞って話しかける努力をした。挨拶だけに終わってしまうことも多かったけれど、数をこなしていくことで、さすがに慣れというものが生じてくる。だんだんと自分にも自信がついてくるような気がした。相変わらず、だつたけれども。

やがて私は十八歳の誕生日を迎えて、誕生パーティが催された。その席で、父が発表した。それは、こともあるつか、私の婚約だった。父が述べる、私の知らない誰かの名前。私が成人すれば結婚させるつもりらしい。父が、全部全部勝手に決めてしまった。私の意志など関係なしに。

ショックだった。

彼と私は所詮結ばれるはずもないことは分かつていたけれど、心のどこかでは夢が現実になることを期待していた。少しづつ近付いた二人に、そんな未来が待つていていた。

分かつっていた、分かつていた、彼の私に対する態度はほとんど変わらないし、兄がいなくなつた空白を私が埋めなければならぬのは。

でも、でも、こういう風に知らされたくはなかつた。彼がいるとここで、何の前置きもなしに。泣きそうになつてしまふのを必死に堪えた。いくら堪えたところで婚約は破棄されないし、彼がダンスを踊つてくれるわけでもない。独りで期待して、傷付いて、馬鹿みたいだ。

私は王女、彼は父の騎士。この関係は、ずっとこのまま。彼が、私の隣に立つことはない。いくら彼が王に相応しい存在であつたとしても、実績を認められたとしても、彼は王になり得ない。それは、彼が人間ではないから。

解つている、解つている。この溝が埋まることはないことは、だから、夢の中でだけは、彼と一緒にいたかった。

パーティの間、彼と話すことはできなかつた。周りにいた誰もが、知らない相手との婚約を祝福してくれる。嫌になる。みんな、私が不幸になるのがそんなに嬉しいのだろうか。嫌だ、嫌だ。見知らぬ相手と結婚して、跡取りを儲けなければならないなどゾッとする。

自室に戻り、身を清め、人払いをした。ベッドの上から月を眺めた。今日は、満月だつた。物思いに耽る。考えたいことは山ほどあつた。

逃げ出してしまおうか？……無理だ。

それならいつそのこと、命を絶つてしまおうか？……無理かもしない。私には、勇気がない。

それでも、始まつたカウントダウン。どちらにせよ、死刑を宣告されているに等しい。結婚したとしても、彼はずつと近くにいるのだ。拷問ではないか。

結婚相手が彼であれば、天にも昇る気持ちだつただろう。

……ああ、そうだ。どうせこの想いが遂げられないのであれば、好きでもない誰かと結婚しなければいけないのであれば、せめて初めて触れられる男性は彼が良い。一度だけで良いのだ、たつた一度

だけ。こんな我儘なお願いを彼が聞いてくれるだらうか？きっと無理だと思うけれど、もしかしたら……、と少しの可能性を考える。

彼も、私に同情してくれないだらうか。同情でも良い、恋愛感情がなくとも良い、これからの中未来を受け入れるための礎が欲しかった。

一度だけでも、夢を見られたら、これからのことも我慢できそうな気がした。

……でも、男性は恋人でもない、好きでもない相手からそんな申し出をされたらどうなのだろう。首を振つて振り払つ。

そうだ、彼が嫌であつてもお願いするくらいでなければ駄目だ。それで押し切れなかつたら、彼に断られたら、諦めるしかない。それほど私が嫌なのであれば、そつ……、もう思い残すこともないだろつ。

ベッドから立ち上がる。高鳴る鼓動を抑えながら上着を羽織り、何度も深呼吸をした。何度も深呼吸をして落着くことはなく、そのうち諦めてそつと部屋を出る。

彼の部屋は知つていた。尋ねるのはもちろん、初めてだつた。

月明かりの下、誰に会つこともなく、彼の部屋の前までたどり着けた。部屋には仄かな明かりが点つている。彼は起きているに違いない。

なかなかドアを開けられなくて、何度も固唾を呑んだ。やつとの思いでドアを開け、彼を確認する。彼がこちらを見て、咎めるように私を『姫』と呼ぶ。もう、あと戻りできない。中に入つて、鍵を

かけようとしたけれど、かけ方が分からなくて、時間がかかった。

ようやく鍵がかかると、彼に近寄つて、必死の思いで抱き付く。彼はかなり驚いたようで、動くことすらままならない様子だった。

私は必死であれこれ理由をつけ、彼にお願いを試みる。死にそうな思いで、私のことが嫌いかどうかを尋ねた。彼は私に好意がある、ようなことを言ってくれたけれど、願い事のほうは父を理由に断られてしまつ。父なんて関係ないのに。やはり、私に興味がないなど、口が裂けても言えなかつたのではないか。

彼にとつて一番大事なのは、私ではなく父で、私など、私など……。

こうなる可能性は初めから高かつた。どこかで分かつっていたのに、考えないようになっていた。それなのに、目の前が真っ暗で、胸が張り裂けそうで、絶望に押し潰されそうだった。

次の瞬間、ああ、これが絶望なら、そのまま押し潰されてしまえば良いのだ、と気付く。このまま、彼に見守られながら死んでしまおう。

自ら命を絶つなどできないと思っていたけれど、それは希望があつたから、その希望すら失せてしまえば、こうも変わるとは。バルコニーに出て、彼に手伝つてもらい手摺に登る。彼が手を離さうとしない。こうこうときだけ、離してくれなくとも良いのに。

やつと離してもらい、身を投げようとすると邪魔される。私は暴れたけれど、それは無意味で……。

私を大人しくさせるためか、口付けをされる。それは効果観面で、

あつという間の出来事だったのに、今度は頭が真っ白になつて動けなくなつた。意地悪な彼。我慢していた涙が溢れてくる。

抵抗したのに、バルコニーから連れ去られ、ベッドの上に下ろされた。希望さえ見出せず、彼にも拒まれ、それなのにこれから生き恥を晒していかなければならぬ惨めな私。震えが止まらない。怖くて怖くてたまらない。

ところが、見かねたのか彼が、私の無理なお願いを聞いてくれる、と言った。耳を疑つた。でも、気が付いた。

彼は、私に死なれると困るのだ。それよりも、私の我慢を聞いたほうがマシだと気付いたのだろう。傷付きはしたけれど、自らが望んだこと。愛されなくても良い。一度だけ、触れてもらえれば……。

嘘を吐いた。

本当は、彼に愛されたい。それも、心から。

けれど、彼は私などにそれほど心を動かされない様子で、いつだつて父の、仕事のことばかり。彼に愛されるのは、どんな女性なのだろう。そんな女性になることは、もはや私には不可能だ。

もう、なにも変われない。手遅れだった。

もし私が王女でなければ、彼に近付けただろうか。後悔ばかり。いえ、後悔してもどうにもならないようなことばかりだ。王女でなければ、彼と出逢えなかつたかもしれない。

彼にとって、仕事の一部として処理されたとしても、触れ合える

ことが奇跡。

どうせなら、と我慢を言うと、彼は夢の中だと同じように、私の名前を呼んでくれた。夢が現実になつたようで、嬉しかった。今まで聞けなかつた、彼の話を聞くこともできた。噂のとおり、彼の半分は人間ではなかつた。それでも、私の気持ちは変わらない。彼が人間だから、好きになつたのではなかつたから。

私が相手なのに、彼は優しかつた。私が王女だからだろ？か。私の身体が、私ではないようで、融けてしまいそうになつた。

彼の大切なものを一つ貰つてしまつた。それを決意してくれただけでも、嬉しかつた。

きっと、ずっと忘れない。この夜のことを。満月がとても綺麗で、彼に触れられ、名前を呼ばれる心地良さ。

月だけが見ていた。

私は調子に乗つて、もう一つお願ひをしてしまつた。もつと先のこと。いつになるかは判らない。私が彼を置いていつてしまつ、ずっと先のこと。返事をしてくれた彼。そのとき覚えていてくれる、実行してくれる保証はなかつた。でも、嘘でも良い、返事をしてくれたことが嬉しかつた。

また普通の日々が戻つた。

父に隠し通せるつもりだつたのに、彼とのことが知られてしまい、ショックキングな出来事も起こつた。けれど、何とか私は立ち直り、

約束どおり父の選んだ相手と結婚する。夫になつた人は優しい人だつたから、想像していたよりも辛くない結婚生活ではあつた。

それでも、夫は彼ではない。

夫との間になかなか子どもはできなかつた。それが私には、父に 対する細やかな仕返しであるかのように思えた。

やがて身籠るも、一人目は王女だつた。二人目も王女だつた。そして、私が三人目を身籠ることはなかつた。

二人目を産んでから体調を崩した私は、ゆるゆると療養を続けていたけれど、娘たちが成人するまでこの身が持たないだらうことに気が付いた。父も他界した。夫が国を治めてくれていたけれど、夫も可哀想だ。私は、自分だけが望んでもいない相手と結婚したと思っていたが、夫もそうだったのかもしれなかつた。

夫のことを見以上に好きになることはなかつたけれど、夫に対してはいつも感謝の気持ちで一杯だつた。

下の娘が五歳になつたころ、私の体調は一気に悪化する。

いよいよだという思い。

娘たちのことは心配だつた。特に下の娘は聰明なのに、怖がりなところが私に似ている。それに、彼のことを怖がつてゐるところも。彼が現れると、動搖して、いつも誰かの後ろに隠れていたものだ。上の娘は勝気な性格のため、彼の存在などもろともしなかつた。

ある晩、酷く咳き込む。喉の奥で血の味がした。息が上手くでき

ない。傍らにいた侍女が医者を呼びに走った。

私は、もう無理だろうと思つた。身体中が限界だと叫んでいる。食事をえ、喉を通らないというのに。最後の最後に思い出すのは、やはり彼のことで、夫でも娘でも、ましてや国のことではなかつた。

彼は覚えているだらうか。最後の、私の我儘な願いを。彼に会いたい。

朦朧とする意識の中、彼に向かつて祈りを捧げていた。ふと気付くと彼がいる。彼が私の手を握ってくれた。彼は覚えていてくれたのだろうか。私の最後を看取つて欲しい、と言つたのを。それとも、これも夢なのだろうか。

彼が名前を呼んでくれる。ああ、これは夢なのだ。一瞬が永遠のよつに思えた。

彼の顔が涙で霞む。微笑んだ彼の顔。やっぱり夢なのだ。

彼がまた私の名前を呼んでくれた気がした。でもそのあと、なにを言つてくれているのか聞こえなくなる。優しい表情。きっと素敵なことを言つてくれているのだらう。聞こえないのが残念だ。

最後の最後に、幸せな夢を見られて良かつた。

私は、生まれてきたことに感謝しながら、静かに目を閉じる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2299ba/>

真夜中の騎士

2012年1月5日21時50分発行